

養護学校小学部用音楽科教科書の分析

齋藤一雄

目的

養護学校小学部用音楽科教科書の掲載教材の分析によって、『おんがく☆』～『おんがく☆☆☆』の教科書の段階的な発展性や有効な活用の方向性を探ることができるか。

養護学校用音楽科教科書は、1964年に作成され、その後、学習指導要領の改訂に伴い、部分的に改訂されている。しかし、実際には、知的障害養護学校においては、活用されていない現状が見られる。そこで、教科書掲載教材を分析しつつ、教材として有効に活用できる方向性を探ることにした。

結果

『おんがく☆』～『おんがく☆☆☆』の教科書に掲載された曲は、子どもの発達段階にみあった配列がなされ、段階的に発展しているといえる。また、奇数の小節数の曲が少ないこと、2～4小節のリズムパターンに混じって1小節や3小節、8小節などのリズムパターンを含んだ曲があることが明らかになった。新たに掲載された曲には、子どもたちの生活や学校行事に関連した内容を持ち、興味をひきおこすリズムがあり、教科書活用の方法を広げるものになっていると考えることができる。

方法

2002年に出された『おんがく☆ おんがく☆☆ おんがく☆☆☆教科書解説』(以下、解説書)¹⁾にある「教科書掲載教材の分析表」にある教材選択の観点と教材選択の視点、さらに、小節数、リズムパターンの種類という観点を加えて、教材の特性について分析を試みた。

内容

1. 先行研究

齋藤・星名(1996)²⁾は、1995年に出された小学部用『おんがく教科書指導書』にある「教科書掲載教材の分析表」を集計し、調性や拍子、速度、音域、教材選択の観点や教材選択の基準が『おんがく☆』～『おんがく☆☆☆』にかけて変化していることは、子どもたちの認識や音楽の発達段階を配慮したものであることを示している。

しかし、実際には、知的障害養護学校においては、養護学校用音楽科教科書の存在について知られてい

ない、活用されていない現状が見られるという(齋藤、1996)³⁾。

2. 教材選択の観点と教材選択の視点について

教材選択の観点について、教科書別に曲数をみると、歌唱の教材の曲が『おんがく☆』から『おんがく☆☆☆』の順に多くなっている。逆に、身体表現の教材の曲が少なくなっている。器楽の教材の曲は、『おんがく☆☆』で多い。鑑賞の教材の曲は、各教科書ともほぼ同様な曲数になっている。

これらの傾向から、子どもたちの音楽表現の発達を考え、音楽遊びや身体表現の活動が多い段階から、器楽表現への分化を図りつつ、歌唱表現へと発展させるという教科書の構成の意図が読みとれる。

次に、教材選択の視点について、教科書別に曲数をみると、『おんがく☆』では遊びを視点とした曲が多く、『おんがく☆☆』では遊びを視点とした曲が少なくなり、季節・生活・生物を視点とした曲が多くなっている。『おんがく☆☆☆』では、季節・遊び・生活を視点とした曲が多いが、行事・自然・生物その他とバランスのとれた構成になっている。

子どもたちにとって身近な遊び・季節・生活・生物の視点から、行事や自然などの視点へと広がっていく教科書の構成の仕方が考えられる。

3. 拍子について

拍子については、小学部用全体をとおして2/4拍子の曲と4/4拍子の曲の割合が大部分を占めた。

2/4拍子の曲の割合は『おんがく☆』から『おんがく☆☆☆』へと少なくなり、逆に、4/4拍子の曲の割合は『おんがく☆』から『おんがく☆☆☆』へと多くなっている。3拍子の曲は全体に少なかった。

この傾向は、曲の構成もわかりやすく、リズムも単純な曲が多い2/4拍子の曲から、曲の構成もリズムもやや複雑な曲が多い4/4拍子の曲へと、子どもたちの理解や表現の発達にそって選曲した結果ではないかと考える。

4. 速度(テンポ)について

テンポについては、『おんがく☆』において100～119のテンポの曲が多くあり、『おんがく☆☆』から『おんがく☆☆☆』では、100～119のテンポの曲が少なくなっている。また、80～99のテンポや120以上のテンポの曲は、各教科書とも同様な割合

になっている。『おんがく☆☆☆』では、その他の割合が多くなっているが、その内容は、速度記号やことばでテンポが表示されているというものである。

一般的にみると、遅い曲の割合が『おんがく☆』から『おんがく☆☆☆』にかけて、少なくなる傾向にある。このことは、子どもたちの表現力や身体能力が高まると、幅広いテンポに応ずることができるようになるということの表れと考えることができる。

5. 小節数について

小節数については、各教科書の楽譜から小節数を集計し、教科書ごとにその割合を示した。『おんがく☆』では8小節から14小節の短い曲の割合が67%、『おんがく☆☆』では57%、『おんがく☆☆☆』では25%と少なくなっている。逆に、16小節以上の曲については、『おんがく☆』では21%、『おんがく☆☆』では43%、『おんがく☆☆☆』では75%と、長い曲の割合が多くなる傾向であった。

また、教科書全体の小節数についてみると、ほとんどが偶数の小節数の曲であったが、奇数の小節数の曲も表1にあるように、19曲と少ないがあった。

6. リズムパターンについて

リズムパターンについては、各曲の楽譜から1フレーズを1つのリズムパターンと考えて、リズムパターンの長さを小節数によってとらえ、リズムパターンの種類についてはその数を集計して、その割合を教科書別に示した。

その結果、リズムパターンについては、『おんがく☆』と『おんがく☆☆』で2小節と4小節のリズムパターンが82%をしめ、『おんがく☆☆☆』では55%であった。その他の曲は、1小節、3小節、5小節、8小節で構成されたリズムパターンが含まれる曲である。

『おんがく☆☆』の曲で例をあげると、1小節は「きみがよ」の「こけの」の部分、3小節は「はんかちのうた」の「しかくにたたんだしわなしはんかちカチカチカチ」の部分、5小節は「ぼうがいつぼんあったとさ」の「あつというまにかわいいコックさん」の部分、8小節は「かめのえんそく」の「かめの遠足は3日前からリュックサックにおかしをつめる」の部分である。

リズムパターンの種類は、1種・2種・3種で半分以上を占め、4種までの曲で80%を占める。また、

多種のリズムパターンの曲でも、パターンの構成はほとんど似たようなもので、一部分だけ異なる部分があるので、多様なリズムパターンとして集計せざるを得ない曲が多い。

全体的に短くて簡潔なものが多いことがわかる。
7. 「かめのえんそく」と「はんかちのうた」について

『おんがく☆☆』の曲の中で、新しい感覚の曲で、しかも、子どもたちの興味・関心や生活に関連した曲として「かめのえんそく」（新沢としひこ作詞・中川ひろたか作曲）、身近生活との関連で「はんかちのうた」（まど・みちお作詞・中田喜直作曲）が今回の改訂で採用された。

2曲とも、33小節と9小節から成る曲で、構成やおさまりという点では、居心地の悪さを感じる面もあるだろう。また、長くてプレスしにくいフレーズや付点のリズムが続くという面もある。

子どもたちの表現能力を考えると、むずかしい部分もあるが、身体による表現活動や楽器による創造的な音楽活動という点、学校生活との結びつきという点などから、学校行事の事前学習や毎日の日常生活学習などでも、有効に活用できる教材だと考える。

参考・引用文献

- 1) 文部科学省(2002)『おんがく☆ おんがく☆☆ おんがく☆☆☆教科書解説』東京書籍
- 2) 齋藤一雄・星名信昭(1996)「養護学校小学部用音楽科教科書の教材分析」『上越教育大学障害児教育実践センター紀要』第2巻, pp. 26-36
- 3) 齋藤加代子(1996)「精神薄弱養護学校『音楽』教科書使用の現状と課題」『埼玉県立南教育センター紀要』vol. 9, pp. 60-63